



飛塚製鋏所 (きょうつかせい)

「飛庄印」の剪定鋏製造販売代表飛塚靖仁氏。新開発の剪定鋏SR-1型で中小企業庁長官賞、片手刈込み鋏片

刃で2006年エクセレントデザイン賞を受賞。「飛龍型」「飛鳥型」剪定鋏が山形セレクトシヨ、認定。インターネットを通じて海外からも注目が集まる。山形市松町1-10-7、電話023-684-5211

使う楽しさと持つ喜びと 抜群の切れ味、世界も注目

山形デザインコンペティション実行委員会(県、山形県商工会議所連合会などで構成)は、魅力的で競争力の強い商品づくりとデザインマインド向上を目指して、「山形エクセレントデザイン事業」を展開。山形県内で企画・開発・生産されている家庭・業務・公共用品3分野を対象に優れたデザイン製品を選定し顕彰しています。山形商工会議所は、「キラリ山形発 元気なモノ作り」シリーズの第2弾として、管内でエクセレントデザインに選ばれた事業所を紹介しています。今月号は、山形打刃物の伝統に裏打ちされた斬新な剪定鋏(せんでいばさみ)を世に送り出している飛塚製鋏所。

山形打刃物の歴史は古い。室町時代の1356(延文元)年、最上家の始祖斯波兼頼が入部に際して召し抱えの鍛冶師を連れて来て、武器や農具をつくったのが始まりとされている。もともと原料となる鉄を求めるとは簡単なことではなく、巷間伝えられるほどの規模ではない。が、鋳物町と並び鍛冶町という町名が今も通り名として市民の口の上っていることを考えれば、山形職人を代表する存在であることは間違いない。とはいえ、剪定鋏となると歴史はぐーんと浅く明治維新直後の事となる。欧州から果樹とともに流入された。維新の廃刀令でつくろものがなくなつた刀鍛冶が、新たな仕事場として活路を見出し、日本独自の技術を加味し今日に至っている。

飛塚靖仁氏は3代目だ。80年ほど前に祖父が創業、父の手によって基礎が築かれた。大学で機械工学を学び帰郷した。工夫を凝らし、「使い易さ」「抜群の切れ味」「優れた耐久性」の3拍子そろつた鋏を生み続けるのは、小さいころから見よう見まねで得た感性と研究心からだろう。さて、ダダダダーという機械ハンマーの連続打音が響く工場で、飛塚氏が鋏を水平に持ち光にかざした。一気に開いてから静かに刃を閉じる。するとどうだ。上下の刃が一点だけで接して徐々に刃先に移動していく。これが抜群の切れ味。枝木の切れ残りのない「飛庄印剪定鋏」の特徴だ。どのような技術なのか。

「大きい方の刃(切り刃)」と小さい方の刃(受け刃)を点で合わせて切る」にはどんな工夫がなされているのか。言葉で表現するのはなかなか容易ではないが、まず、ハマグリと呼ばれる二枚刃のような形状。曲線となつた刃が枝を押し分けて進みやすくなる。さらに、刃と切断面の摩擦抵抗を少なくするため、切り刃の擦り合わせ面を少し丸く、真ん中をへこませ、受け刃にはわずかにひねりをつける。「上下の刃が点で接して徐々に刃先に動く」工夫で、量産品



ではそうはいかない。(量産品では)切り刃と受け刃がちょうど板を合わせたように面であつたようにになり枝を切ると皮が残ってしまう。最後にネジを締め上げて、かみ合わせを見る。感触を確かめながらガタがなくスムーズに開閉するように調整する。まことに精緻な技術が「この一丁に」集約されている。

る。切断に余分な力は要らない。止めのスプリングを付けたことで切り抜けた際に受けるショックが緩和される。飛塚氏はじめスタッフは独自に考案すると同時に、使用者(ユーザー)からの要望に耳を傾けることを大事にしている。2つの製品は青森のリンゴ農家から「長時間剪定作業しても、手が疲れにくい鋏をつくってほしい」との要望に応えた結果だ。



「使う楽しさ 持つ喜び」(飛塚製鋏所のモットー)。

使い手の声に耳を傾け、使い手の立場に立つて独自の工夫を凝らした剪定鋏。手づくりならではだ(写真説明)ダダダーと連続打音が響き、研磨の火花が散る工場。そこから逸品が生まれる。飛塚氏(中央)を挟み長男大貴氏(左)、甥の陽介氏(右)、奥に弟の義孝氏